

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

げんおんりゆうちよう こと

（源遠流長の事）

新版
1614
ゝ
1617

しじようきんごどのごへんじ げんおんりゆうちよう こと

四条金吾殿御返事（源遠流長の事）

こうあん ねん がつ にち さい しじようきんご

弘安2年（'79）9月15日 58歳 四条金吾

ぜにいつかんもんた よりもと 進 そうろう ほけきよう

錢一貫文給びて、頼基がまいらせ候とて、法華經の

ごほうぜん もう あ そうろう さだ とお きようしゆしやくそん

御宝前に申し上げて候。定めて、遠くは教主釈尊なら

たほう じつぽう しよぶつ ちか にちがつ くてん たも

びに多宝・十方の諸仏、近くは日月の宮殿にわたらせ給う

ごしようらんそうら

も、御照覧候いぬらん。

ひと 世 勝 けんじん しやうにん 思

さては、人のよにすぐれんとするをば、賢人・聖人とおぼ

ひとびと みな 嫉 妬 そうろう 況 つね ひと

しき人々も皆、そねみ、ねたむことに候。いおうや常の人

をや。

かんこう

おうしようくん

さんぜん

后

嫉

たいしやく

漢皇の王昭君をば三千のきさきこれをそねみ、帝釈の

くじゅうくおくなゆた

きようしか

妬

さきのちゅうしよおう

九十九億那由他のきさきは橋戸迦をねたむ。前中書王を

小野みや おとど

きたの てんじん

ときひら

ば、おのの宮の大臣これをねたむ。北野の天神をば、時平の

大臣

讒奏

なが たてまつ

おとどこれをさんそうして流し奉る。

思

にゆうどうどの

みうち

ひろ

うち

これらをもつておぼしめせ。入道殿の御内は広かりし内

狭

たま

公

達

おお

たも

なれども、せばくならせ給い、きゆうだちは多くわたらせ給

うち

年

来

ひとびと 数

多

たま

いけ

みず

少

う。内のとしごろの人々あまたわたらせ給えば、池の水すく

うお 騒

あきかぜた

とり

梢

争

なくなれば魚さわがしく、秋風立てば鳥こずえをあらそう

そうろう

そうら

幾

みうち

ひとびと

嫉

ように候ことに候えば、いくそばくぞ御内の人々そねみ

そろう

たびたび

おお

返

時

々

みこころ

違

候らん、度々の仰せをかえし、よりよりの御心にたがわ

たま

讒

言

そろう

たびたび

せ給えば、いくそばくのざんげんこそ候らん、度々の

ごしよりよう

返

いま

しよりようたま

たも

うんぬん

ほど

御所領をかえして、今また所領給わらせ給うと云々。これ程

ふしぎ

そろう

いんとく

ようほう

の不思議は候わず。これひとえに、「陰徳あれば陽報あり」

わ

しゅ

ほけきよう

しん

とは、これなり。我が主に法華経を信じさせまいらせんと

思

みこころ

深

ゆえ

おぼしめす御心のふかき故か。

あじやせおう

ほとけ

おんあだ

ぎばだいじん

おん

勸

阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すすめによ

ほけきよう

ごしん

よ

たも

たも

みようしようごんのう

つて法華経を御信じありて代を持ち給う。妙莊嚴王は

にし

おん

じゃけん

翻

たも

二子の御すすめによつて、邪見をひるがえし給う。これま

然

きへん おん

いま みこころ

和

たしかるべし。貴辺の御すすめによつて、今は御心もやわ

たま

そうろう

きへん

ほけきよう

ご

らがせ給いてや候らん。これひとえに貴辺の法華経の御

しんじん

深

ゆえ

信心のふかき故なり。

ね 深

えだ 栄

みなもととお

なが

なが

もう

「根ふかければ枝さかえ、源遠ければ流れ長し」と申し

いっさい

きよう

ね 浅

なが

近

ほけきよう

ね

みなもと

て、一切の経は根あさく流れちかく、法華経は根ふかく源

まつだいあくせ

尽

栄

てんだいだいし

遊

とおし、末代悪世までもつきずさかうべしと天台大師あそば

たま

ほうもん

付

ひと 数

多

そうら

し給えり。この法門につきし人あまた候いしかども、

公

私

だいなんたびたびかさ

そうら

いちねんにねん

おおやけ・わたくしの大難度々重なり候いしかば、一年二年

付

そうら

のちのち

みな

落

こそつき候いしが、後々には、皆、あるいはおち、あるい

返　や　射

み

ハハハ

はかえり矢をいる。あるいは身はおちねども心おち、ある

こころ

み

いは心はおちねども身はおちぬ。

しゃかぶつ

じようぼんおう

ちやくし

いちえんぶだい

ちぎよう

はちまん

釈迦仏は、浄飯王の嫡子、一閻浮提を知行すること八万

しせんひやくいちじゆう

だいおう

いちえんぶだい

しよおう

こうべ

傾

四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王、頭をかたぶけ

うえ

みうち

め

使

ひとじゆうまんおくにん

じゆうく

ん上、御内に召しつかいし人十萬億人なりしかども、十九

おんとし

じようぼんおう

みや

い

たま

だんどくせん

い

の御年、浄飯王の宮を出でさせ給いて、檀特山に入つて

じゆうにねん

あいだ

おん

供

ひとごにん

くりん

十二年、その間、御ともの人五人なり。いわゆる、拘隣と

あび

ばつだい

じゆうりきかしよう

くりたいし

ごにん

頻輒と跋提と十力迦葉と拘利太子となり。この五人も、

ろくねん

もう

ににん

さ

のこ

さんにん

のち

ろくねん

捨

六年と申せしに二人は去りぬ。残りの三人も後の六年にす

たてまつ

さ

いちにんのこ

たま

ほとけ

成

て奉つて去りぬ。ただ一人残り給いてこそ仏にはならせ

たま

ほけきよう

過

ひとしん

給いしか。法華経は、またこれにもすぎて人信じがたかる

なんしんなんげ

べし。難信難解これなり。

ほとけ

ざいせ

まつぼう

だいなん

また仏の在世よりも末法は大難かさなるべし。これを

堪

ぎようじや

わ

くどく

勝

いっこう

こらえん行者は、我が功德にはすぐれたること一劫とこそ

と

そうら

説かれて候え。

ほとけめつど

のちにせんにひやくさんじゅうよねん

そうろう

がつし

仏滅度して後二千二百三十余年になり候に、月氏

いっせんよねん

あいだ

ぶつぼう

ぐつう

ひと

でんき

載

隠

一千余年が間、仏法を弘通せる人、伝記にのせてかくれな

かんどいっせんねん

にほんしちひやくねん

もくろく

載

そうら

し。漢土一千年、日本七百年、また目録にのせて候いし

ほとけ

だいなん

あ

ひとびとすく

われ

しょうにん

かども、仏のごとく大難に値える人々少なし。我も聖人、

われ けんじん

もう

きようめつどご

きもん

あ

ひといちにん

我も賢人とは申せども、「況滅度後」の記文に値える人一人

そうら

りゆうじゆぼさつ

てんだい

でんぎよう

ぶつぽう

だいなん

あ

も候わず。竜樹菩薩・天台・伝教こそ仏法の大難に値え

ひとびと

そうら

ぶつせつ

およ

る人々にては候えども、これらも仏説には及ぶことなし。

すなわ

よ 上

ほけきよう

とき

う

あ

たま

これ即ち、代のあがり、法華経の時に生まれ値わせ給わざ

ゆえ

る故なり。

いま

とき

のち

ごひやくさい

まつぽう

はじ

ひ

ごがつ

今は、時すでに後の五百歳、末法の始めなり。日には五月

じゆうごにち

つき

はちがつじゆうごや

に

てんだい

でんぎよう

さき

う

十五日、月には八月十五夜に似たり。天台・伝教は先に生

たま

いま

のち

後

悔

たいじん

やぶ

まれ給えり。今より後は、またのちぐえなり。大陣すでに破

よとう　もの

数

いま

ほとけ

しる

置

たま

れぬ、余党は物のかずならず。今こそ仏の記しおき給いし

のち　ごひやくさい

まっぼう

はじ

きようめつどご

とき

あ

そうら

後の五百歳、末法の初め、「況滅度後」の時に当たつて候え

ぶつこ　虚

いちえんぶだい

うち

さだ

しょうにんしゅつげん

ば、仏語むなしからずば、一閻浮提の内に定めて聖人出現

そうろう

しょうにん

い

徴

いちえんぶだいいいち

して候らん。聖人の出ずるしるしには一閻浮提第一の

かつせん　起

と

そうろう

かつせん

お

合戦おこるべしと説かれて候に、すでに合戦も起こつて

そうろう

しょうにん

いちえんぶだい

うち

い

たま

そうろう

候に、すでに聖人や一閻浮提の内に出でさせ給いて候

らん。

麒麟　い

こうし

せいじん

知

りしや　鳴

せいじん　い

きりん出でしかば、孔子を聖人とする。里社なつて聖人出

たも

うたが

ほとけ

せんだん

き　生

しょうにん

で給うこと疑いなし。仏には梅檀の木おいて聖人とする。

ろうし にご もん ふ せいじん まつだい ほけきよう しょうにん

老子は二五の文を蹈んで聖人とする。末代の法華經の聖人

な^に 知^ち きよう い よ きよう と

をば何をもつてかしるべき。經に云わく、能くこの經を説

よ きよう たも ひと すなわ によらい つか はっかん

き、能くこの經を持つの人、則ち如来の使いなり。八卷・

いっかん いっぽん いちげ ひと ないしだいもく とな ひと によらい つか

一卷・一品・一偈の人、乃至題目を唱うる人、如来の使いな

しちゆうじゆう 捨^す だいなん 通^{つう} ひと によらい つか

り。始中終すてずして大難をとおす人、如来の使いなり。

にちれん こころ まった によらい つか ぼんぷ ゆえ

日蓮が心は全く如来の使いにはあらず。凡夫なる故な

さんるい だいおんてき 怨^{をん} にど るなん あ

り。ただし、三類の大怨敵にあだまれて二度の流難に値え

によらい おんつか に こころ さんどく いっしんぼんぷ

ば、如来の御使いに似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫に

そうら くち なんみようほうれんげきよう もう によらい つか

て候えども、口に南無妙法蓮華經と申せば、如来の使いに

に かこ たず ふきようぼさつ に げんざい 訪
似たり。過去を尋ねれば、不輕菩薩に似たり。現在をとぶら

とうじようがしやく くわ

違

みらい とうけい

うに、「刀杖瓦石を加う」にたがうことなし。未来は当詣

どうじようたが

養

たも ひとびと

道場疑いなからんか。これをやしなわせ給う人々は、あ

どうごじようど

ひと

ことおお

もう

止

そうろう

に同居浄土の人にあらずや。事多しと申せども、とどめ候。

こころ

はか

たも

心をもつて計らせ給うべし。

稚児

所 労

よろこ

そうろう

だいしんの

ちこのそろう、よくなりたり。悦び候ぞ。また、大進

あじやり しきよ

まつだい

耆 婆

過

阿闍梨の死去のこと、「末代のぎば、いかでか、これにすぐ

みなひとした

振

そうろう

そうら

べき」と、皆人舌をふり候なり。さにて候いけるやらん。

さんみぼう

しろう

ふけい

三位房がこと、そう四郎がこと、このことはあたかも符契、

ふけい もう 合 そうろう にちれん ししよう 任
符契と申しあいて候。日蓮が死生をばまかせまいらせて

そうろう まった ほか 医もち そうろう
候。全く他のくすしをば用いまじく候なり。

くがつじゅうごにち
九月十五日

にちれん かおう
日蓮 花押

しじようきんごどの
四条金吾殿